
オタリーマンの外史生活

アグカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オタリーマンの外史生活

【Nコード】

N5880Q

【作者名】

アグカ

【あらすじ】

「ゼロ魔の世界で老衰を向かえ死んだ藤崎充が、またもや違う世界に？

今回の世界は・・・真・恋姫＋無双だつて？マジかよ、死亡フラグが満載じゃねえか！はあ、また命かけてがんばるしかないのか（；・、・）」またもや作者の妄想が暴走し書き始めました。こちらは不定期更新です。適度に書いていきますので、お暇なときに読んでいただければ幸いです。『原作ブレイク／主人公最強／キャラ改変／ハーレム要素／ご都合主義／妄想暴走』要素が多分に含まれてい

ます。これらがお嫌いな方は拒絶反応と鳥肌が発生する恐れがありますので、ブラウザの戻るボタンを押すことを推奨いたします。

利用規約改定に伴い追加、「技名、魔法名、人物名などに原作となる小説、漫画、ゲームなどから一部お借りしている（転載）部分があります。」――――4月27日
追記『序幕より全面的に書き直します。』

序幕：新たな外史の幕開け（前書き）

4 / 27より外史生活全面書き直しを実施します。序幕から全て書き直しです。

序幕については、旧作とほぼ内容は同じですが一人称の変更など結構書き直しております。

序幕：新たな外史の幕開け

ああ、思えばすごい人生だった……
突然ルイズに召喚され、色々な敵と戦い……
そして素晴らしい女性達と一緒に……
多くの子を成した……

辛い事もあったが楽しかったな……
皆先に逝ってしまったて一人逝く事に泣いたな……
やっと私も彼女達の所にいけるか……
待たせすぎてしまったからな、怒られるかもしれない、はは……
ああ、皆、今、そっちに行くよ……

……藤崎充、享年九十八歳

……数々の武勲を立て、また、国の改革に貢献
……多くの妻を娶り、多くの子をなし幸せな生活を送る
……この世界において、彼の名を知らぬものはいない

「……ここは、一体……。うう……。確かに俺は死
んだはず……。なのに何故……。ここがああ世なのだろうか？」

辺りを見回すと、真っ白な空間だけが広がっている。
この光景には見覚えがあるが……。まさか……
いや、あり得ん、私はすでに死んだんだ……

そんな私がどうしてまたここにいるんだ……
駄目だ、考えてもあの今わの際以降の事は何もわからない……

「何故私はここに……くっ、体が動かない……」

ドンッ！

現状を把握できず、思考も纏まらない私の前に突如として出現したものの、それは『扉』……

あの時ルイズに召喚された際に潜った扉と同じ物……

「……またなのか？ 私はまた何処か見知らぬ世界へ飛ばされるのか……こんな老人の私を飛ばしてどうなるというのだ。何処へ行っただとしても、何も出来はしないというのに……」

私がそう言うのも構わず、『扉』は開いていく……
問答無用という訳か……

どのみち抵抗も出来んこの状態では……
はぁ、やっと皆に会えると思っていたのだが……

……ギイッ
……カッ

扉が開き、光があふれ、俺の意識は遠のいていった……

...

.....

ここに、新たな外史の突端が開かれた……

果たして彼がどのような物語を紡ぐのか、それは誰も知らない……

...

序幕：新たな外史の幕開け（後書き）

という訳で、活動報告にも書きましたが外史生活を全面的に書き換えます。

内容としては、原作をトレースするのではなく、独自ルートで歩みます。

何れは腰を落ち着けるとは思いますが、かなり放浪する事になります。

旧作は一応保管してはありますので、いつか折りを見て書けたらなあと思います。

EX幕：主人公設定（前書き）

今回は主人公設定です。今時点では、原作知識などはほぼ皆無です。なんせ、九十八歳ですからね、忘れてても仕方ないです。

2 / 13

大幅に改編しました。

EX幕：主人公設定

主人公プロフィール

名前：藤崎充ふじさきたかし

ハルケギニアでの名前：タカシ・シュヴァリエ・ラ・フジサキ・ド・オルニエール・ル・ブラン・ラ・ライクス・ド・ラ・ヴァリエール

人種：生粋の日本人

見た目：黒髪、黒目、体格は無駄な肉はなく筋肉もしっかり付いている

顔は長年の修行などにより精悍な顔つきに

身長：185.6

体重：81.3

一人称：基本は『私』

興奮している場合などは『俺』

趣味

ハルケギニア：孫と遊ぶ

嫁とイチャラブ

能力特訓

若い者への指導

友人たちとの酒盛り

現実世界での好きなもの

ゲーム：FFシリーズ（オンライン含む）／DQシリーズ（主に3、4、5）／スパロボOGシリーズ／

大戦略系／シュミレーション系／

アニメ／漫画：ガンダム系（特に0083）／熱血スパロボ系／ルパンシリーズ（とつつあん信者）／

Fate／ネギま（大戦期とバトル部分）

／鋼の錬金術師／仮面ライダーシリーズ／

ロトの紋章／

ハルケギニアで好きなもの

・家族全員

・親しい人達

・領民などの市井の人々

・飼ってる動物や幻獣

性格／性質

・長年の領主経験により押しよせの弱さは克服

・ただし家族、特に妻達に弱いのは変わらず

・弱者に対してなるべく負担はかけないが必要であれば切っ捨てる事もする

・自分より年下には結構甘い

・有事の際は自分が率先して動く

・自分の大事な人や物に対して手を出す輩には一片の躊躇もない

年齢

ハルケギニアでの年齢：享年九十八歳
恋姫世界での年齢：24歳

家族構成

ハルケギニアでの家族構成：妻六人、子供十八、孫二十六人
恋姫世界：不明

頭脳関係

学力：元々の大学卒程度に加え、ハルケギニアでの帝王学や農業学など複数の学問を修めた為
かなりの知識量を誇る

経験：自領であるラ・ライクス、ド・オルニエール、ヴァリエール領の三つを管理運営していた経験がある
引退後も国政などに携わっていた為、経験はかなりのものになる。

賢王となったジョゼフ一世とも親しかった関係で大国の政治も心得ている

霸王曹操であつても経験上勝つ事は不可

言語：漢字は使用可能

漢文は不可

彼女関係

ハルケギニア：ハーレム築いたリア充
恋姫世界：不明

ゼロ魔世界における主人公

- ・ 各種の戦乱や死亡フラグを叩き折り、妻達と幸せに暮らしていた。
 - ・ 数々の武勲などにより、国では英雄扱い。
 - ・ 本人的には英雄と呼ばれる事を好いていない
 - ・ 平民を大事にする領主として絶大な人気を誇る。
よく街に抜け出していた
 - ・ 王家も彼には頭が上がりず、ご意見番的な存在。
アホリエツタとアハウエルズを調教した為
 - ・ 子供や孫には超が千個くらいつくほどに甘い。
 - ・ 妻達にベタ惚れで、所構わずのろけることで有名。
 - ・ 求婚は多いが最終的に妻は八人で納まった模様。
 - ・ 子供十八人、孫二十六人の大家族の長
 - ・ 大国ガリアの国王ジョゼフ一世とギーシュ・ド・グラモンは大親友
特にギーシュとは年齢を超えた親友
 - ・ ジョゼフとはよく一緒に酒を飲む
 - ・ 義母上による特訓、もとい、拷問を耐え切った漢
- ほとんど伝説と化している

恋姫原作知識関連

一応現実世界で友人から借りたエロゲーをプレイしたために、恋姫に触れた事はあるが、内容は覚えていない。

三国志知識

劉備など本当に有名どころの武将くらいはなんとなく覚えているかも？

一刀からの情報により、三国志の一般的な知識を得る。
ゲームとかでもわかる範囲

時系列についても、ある程度は把握出来た模様

覚えているイベント

- ・黄巾の乱のみ

詳細は覚えていない

- ・新たに情報を得ている為、他のイベントについても大まかには把握

三国志覚えている人物

- ・劉備

- ・関羽

- ・張飛

- ・曹操

- ・孫策

恋姫として覚えているキャラはなし

覚えている（思い出せる）原作知識

- ・黄巾の乱が起きること

能力設定

使い魔設定：ガンダールヴ

ヴィンダールヴ

ミヨズニトニルン

第4の使い魔

この中で、第4の使い魔以外はすべて原作に準じます。

各使い魔の能力の併用は可能

例) ガンダールブの身体能力強化を使いながら第4の使い魔の能力使用

第4の使い魔能力：自身の『記憶』にある『技』『呪文』『能力』を再現。

たとえ記憶していても、内容を思い出せないものは使用不可。

名称だけ覚えていても効果や内容を覚えていないものは不可

ド えものの道具などを直接召還することはできません。

呪文や技により召還できるものは道具類でも

召還可

ゲートオブバビロン
宝具は王の財宝を経由する物は可。

ゲートオブバビロン
王の財宝の内容物は本作独自設定。

虚無魔法についてもジョゼフや覚醒したルイズ

などに教わり

使用可能となっている。

多用するのは『加速』『デイスペル』『イリユ

ージョン』

テレポート
『瞬間移動』

肉体のスペックはガンダールヴの能力に加え長

年の義母上による

拷問という名の特訓により常人を遙かに上回る
スペックに到達し、

肉体的にもチートの域に達している。

武術関係も一通り収めている。

特に『剣術』『槍術』『馬術』『弓術』が得意。

ている為、

『技』に関しては再現した物を自らのものとし

能力を使用しなくても使用可能。

主に剣技として神鳴流を多用する。

同時使用不可

能力使用例1)ドラクエやFFの魔法や技を使う
能力使用例2)ドラクエの魔法とFFの魔法の

例外として先にFF強化魔法

をかけておき、

DQの攻撃魔法を使うことは

可能。

ドラクエ3の能力を使いながら

4の能力を

使うことも不可

補足説明

『扉』を潜ったため、人との対話は可能。
漢文を読むことはできない。

九十八歳まで生きたため、結構爺くさい。
鈴々などは子供扱いしてしまう。

その他

文明的なところから、古代中国である事はある程度察している。
一先ず情報を得る事を目的に旅をする事に。
以後どのような経緯を辿るかは神のみぞ知る。

EX幕：主人公設定（後書き）

ちよいと滅茶苦茶だったので、思いつきり修正かけました。
一応ゼ口魔の方と共通の設定があります。

なお、こちらは独自の設定に基づいている部分があります。
具体的には、妻の数などです。

ですので、こちらの設定とゼ口魔での設定が食い違う事があります
がご了承ください。

第一幕：目覚めた場所は……（前書き）

ふう、漸く書き上げました。つか、最初に書いたのとは全然違う内容になりました。ぶっちゃけ、原型無いっす。
そんなではどうぞ。

第一幕：目覚めた場所は……

……
……

「う……う……」

目を開けると、眩い光が差し込んでくる。

「こ、ここは……わ、私は生きているのか……」

……私は確かに子供達や孫達に見送られて死んだはず。
本来であればあの世に行くべきなのだろうが、ここがあの世という事はどうやら無いようだ。

明らかに見知らぬ場所ではあるが、現世である事は違いないう。
う。

何せ五感全て感触があるからな……

しかし、何故私はまたあの『扉』の前に出てしまったのだ。

あれは、私がハルケギニアに召喚された時に通過した扉と同じ物のはず……それが何故……駄目だな、考えても答えは出そうにない。
とりあえず、周辺を探ってみるか。

……
……

あたり一面森か……人の気配は無さそうだな。
どうしたものか、これではここが何処なのかもわからん。
調べるにしても、迂闊に動くのは危険だな。

そういえば私のルーンはどうなっているのだろう。
私も一度死んでいる以上、ルーンは消えている可能性があるが……

「……何故残っているのだ」

わからん、普通使い魔が死ねばルーンは消えるはず。
それに今はルイズももう……なのに何故ルーンが全て残っている。
いかん、これでは何もわからず終いでは無いか。
なんとか情報を集めねば、これから先どうすべきかも検討がつか
ん。

「仕方が無い、少し歩いて人里を探すしかないか」

……
……

しかし、行けども行けども森か……これはどうやらかなり深い森
のようだな。

うゝむ、どうしたものか……早めに水と食料の確保をしておくべ
きかもしれんがこの辺りの地理など、全くわからない状況では探し
ようが……

「ん、この音は……水の流れる音が、近くに川でもあるのかもしれ

ん、行ってみるか」

……

……

少し歩いた先に、予想通り川が流れている。

助かった、見たところ魚もいるようだし、食料についてもなんとかなりそうだな。

しかし、ここは一体どこなんだろうか……感覚的には恐らくハルケギニアでは無いはずなんだが……

まあ、今考えても仕方ないか……一先ず食料と水を確保しておこう。

詰める袋は……錬金で作ればいいだろうな。

さて、始めるとするか。

……

……

これだけあれば、当面の間は問題ないだろう。
ゲート・オブ・バビロン

王の財宝の中に入れておけば腐る事も無いしな。

「とりあえずは、日も傾いている事だし、移動は明日からにしておくか」

しかし、なぜ私はこうして生きているのだろうか。

これではまた、妻達の元へ行くのが遅くなりそうだ。

エレンなどはきつと怒っているかもしれない、すまないな皆、私が行くのはもう少し遅くなりそうだ。

……

……

「……う、うむ……もう朝か、あれから直ぐに寝てしまったのか」

色々と理解出来ない状況が続いて、自分でも知らぬ内に精神的に疲れていたのかもしれない。

さてと、とりあえず当初の予定通り人里を探してみるか。
幸いにしてルーンは無事だからな、なんとかなるだろう。

「では、飛行^{フライ}」

しかし、精霊の気配が無いのに魔法が使えるとはな。

どうにも腑に落ちんが、まあ、今はあまり深く考える必要も無い
か。

さて、人里らしきものは……ふむ、どうやら西の方角に複数の家
らしきものが見えるな。

一先ずあそこへ行ってみるか。

歩いていくには少々距離がありすぎるから、このまま飛行^{フライ}で飛ん
で行き、近くに降りるとしよう。

余り目立ちすぎるのもあれだからな。

……

……

村

さて、近くまで来たはいいのだが……何やらあまり人の気配がしないな。

それに家屋の方も遠目からではわからなかったが、かなり損傷が激しい。

これは廃村かもしれんな。

「うゝむ、どうしたものか……」

「あ、あの……」

「ん？ おお、人が居たか」

そこに現れたのは、十二、三歳程度の子供だ。

身なりもかなり酷い状態だな。

これは何やら厄介事かもしれん……はあ、全く、何処へ行こうとも厄介事からは逃げられんのか、私は……

「あの……貴方様は……」

「ああ、旅の者だ、たまたま民家らしき物が見えたので立ち寄ったのだが」

「そう、ですか……」

「君一人かね？」

「いえ、他に子供と老人が何人か……」

「ふむ……何やら事情がありそうだな、よければ話してみないかね、力になれるかもしれんぞ」

「……実は」

そうして聞かされた内容は……ここ最近、何やら爆発的に盗賊が増え始めこの村から北に行った所に、盗賊の住処が出来てしまったようだ。

なんでも、百人規模の盗賊らしく抵抗する間も無くやられてしまったらしい。

その為、今ではこの村には子供と老人くらいしか残っていないようだ。

若い男や女は攫われるか、殺されるかしたらしい。

はあ、どこの世界でも下種はいるものだな。

「なるほど、そういう理由だったのか」

「はい……」

「しかし、官憲の類はどうしたのだ？ 少なくとも領主くらいはいるだろう？」

「それが……」

更に話を聞くと、官憲の類は盗賊に敵わぬとわかった途端、逃げ出してしまったらしい。

今ではこの周辺はまともな領主も存在せず、各村々が独自に自警団を結成しているようだ。

とはいえ、まともな装備もある訳が無く、盗賊による被害は日に日に大きくなっているようだ。

「はあ……情けない限りだな」

「……」

「まあいい、とりあえず事情はわかった。一先ずは怪我人の治療に当たるとしようか。」

「え、でも……私達お金が……」

「そんなものいらんよ、困ったときはお互い様だ」

「あ、ありが、とう、ございます……」

「何、気にするな」

やれやれ、こんな子供がなあ……不憫なものだ。

その盗賊とやら、後で掃除しておくか。

どんな理由があるにせよ、盗賊などする輩に人権なぞ存在しないからな。

徹底的に消してやろう。

と、その前に残った村人の治療だな。

まあ、癒^{ヒーリング}しか『ケアルラ』あたりで問題無く治療出来るだろう。
頑張るとしようかね。

「何、少々掃除に行くだけだ、直ぐ戻る」

それでは盗賊退治をするでしょう。

しかしまあ、あれだな、生き返ってもまたこのような事に巻き込まれてしまうとはな。

私が厄介事に巻き込まれるのは、あれか、義母上の呪いなのだろうか……

「あまり不穏な事は考えない方がいいか……さっさと済ませよう」

……
……

盗賊の住処

盗賊の住処の上空までやってきたが……やれやれ、どうしてこう下種というのはどこの世界も変わらぬのだ。

見ているだけで吐き気がしてくる。

それに、何人かの死体も見えるな。

恐らく攫われた人達だろう……やり切れんものだ。

まあ、これで心置きなく下種共を消せるな。

とはいえ、捕まっている人達がいるかもしれん以上、大規模魔法は使えない。

となれば白兵戦に持ち込むしかないか……

「とりあえず、飛行^{フライ}から飛行魔法に切り替えて……後は分身^{わけみのじ}の術^{ゆっ}を掛けて……」

わけのしゅつ
分身の術も義母上との特訓の最中に思い出した、ネギま！の魔法の一種だ。

原作では一度か二度しか出ていなかったが、なかなか便利な魔法だ。

まあ、偏在ほどでは無いがな。
さて、それでは往くとするか。

……
……

「へへへ、今回もいい稼ぎになったぜ」

「そうだなあ、後は女共を売りさばけば更に稼ぎが増えるぜ」

やれやれ、聞くに耐えんな……さつさと掃除するでしょう。

最早、こいつらに情けを掛ける必要は無いだろう。

徹底的に狩り尽す。

「遺言はそれで終いか」

「なっ！ 誰だ、てめえ！」

「貴様らのような下種に名乗る名は無い、早々に消えて貰おう」

「へへへ、この人数に勝てるつもりかよ……お前らやっちゃまえ！」

「おう！」

全く、相手がどれ程の実力かもわからんか。

まあ盗賊など、所詮その程度の者だからな、余り期待するのもバカらしいか。

さて、始めるとしようか。

.....
.....
それから完全に一方的な、戦いとも呼べないものだった。
わけみのじゅつ
分身の術の状態で、剣術だけで戦ったのだが齒ごたえが無さすぎ
た。

そのため、一時間も掛からぬ間に終わってしまった。
逃げ出した者も、一人残らず処分しておいた。

どの道、一度獣に堕ちた身だ、このまま逃がしたとしてもどうせ
別の場所で同じ事を繰り返す。

これ以上被害が広がらぬようにする為にも、ここで徹底的に禍根
を断つに限る。

後は囚われているであろう人達を救出するだけだな。

.....
.....

その後、盗賊の住処の中に囚われていた人々を救出。

中には酷い怪我をしていた者もいたので、先に治療を施した。

序に盗賊共が隠していた財宝については全て没収しておいた。

本来なら官憲に渡すべきなのだろうが、既に逃げ出した無責任な
連中に渡す必要性は無いだろう。

という事で、財宝に関しては村人の方で管理するように言ってお
いた。

まあ、官憲にバレると面倒なので、勿論隠しておくようにも伝え

ておいたがな。

それから、程なくして村へ戻った。

家族と再会出来た喜びからか、皆一様に涙を流していた。

感動の再会が終わった後、この辺りの事について尋ねたのだが、
どうやら予想通りここはハルケギニアでは無いようだ。

使用する言語などの関係から、恐らくは中国大陆であろうとあたりをつけた。

しかも、中国大陆といっても、遙か古代の中国だ。

となると……恐らくうつすらと覚えている限りでは三国志辺りの時代か。

うーむ、最早三国志の内容など覚えていないのだがなあ……これは面倒な事になりそうな予感がするな。

まあ、何時までもこの村に留まっている訳にもいかない。

より多く情報を掴むためにも、少し旅を試みるとしよう。

村人に聞いたところ、ここより北に『陳留』なる都市がありそこは『曹操』なる人物が治めているそうだ。

なんでも、曹操の治世は素晴らしいらしく、陳留の街は安定しているのだそうだ。

ふむ、ならば一度そこを目指してみよう。

村人に別れを告げると、非常に感謝され食料などを提供されたが、この村も食べる物も少ないようなので辞退させて貰ったのだが、どうしても礼がしたいとの事で盗賊共の財宝から好きなだけ持って行ってくれと言われてしまい……あまり過剰な礼は必要ないのだが、まあ、致し方ないので旅に必要と思われる分だけ頂いておいた。

まあ、いざとなれば錬金術などで幾らでも作れるのであまり必要

性は無いのだがね。

さて、膳は急げとも言いつし、出発するとしよう。

「では、私は陳留という街へ向かう。皆も達者でな。」

「はい、本当にありがとうございます」

「ふふ、元気で暮らせ、ではな」

さあ、この先に何が待ち受けているのやら。

せつかく新しい生を得たのだから、精一杯生きるとしよう。

第一幕：目覚めた場所は……（後書き）

さて、一話目では原作キャラ誰も出ませんね。次の都市が陳留という事もあり、あれが出ますし、種馬も出ます。まあ、時期的には種馬を拾った後くらいですかね。道すがら黄巾党の噂がこれから先流れてくるでしょう。その時、タカシがどういった行動を取るのか…
…義母上に毒されてなきやいいんですが。

では、次の更新までよろしく願います。

第二幕：陳留の曹操と……（前書き）

今回は曹操のお話です。といっても、後一〜二話位でまた別の場所へ移動しますが。それと予告どおり種馬君も出しました。
ではどうぞ〜

第二幕：陳留の曹操と……

現在村人に教えて貰った『陳留』という街に向かい歩いている。
イクシオンでも喚び出せばいいのだが、余り目立つのもあれな
で一先ず歩きだ。

とはいえ、夜間などは飛行フライを使っているので、もう直ぐ到着する
とは思うのだから。

と、どうやら考え事をしている間に街が見えてきたようだな。

「ふむ、あれが陳留か」

割と大きな街ではあるが……随分と大きな城壁に囲まれているな。
この世界の都市は、どこもあいつた造りなのだろうか。

あれでは住民の息が詰まってしまいそうだが……まあ、三国志は
確か群雄割拠の時代のはずだから、都市を守る為にもあいつた城
壁が必要なのかもしれんな。

家の領地では、街や村に城壁は無かったな、柵はあったが。

まあ、家の領地に不当な真似をしようという愚か者は、ほとんど
存在しなかったからなあ。

そのような事をしようものなら、直轄軍により即時殲滅されてい
たからなあ。

「懐かしいものだな……さて、街に入るとするか」

街の入り口にあたる大きな門の前に門番がいるが、普通に通れて
しまった。

自分で言うのもなんだが、服装などから呼び止められると思って
いたのだから……いいのだろうか。

主人公の服は、ハルケギニア製のスーツです。
元々着ていた服をベースに作られています。
ハルケギニアでは、定番の貴族服となっています。

……

……

陳留

ふむ、ここが陳留か、村人に聞いたとおり賑わっているな。
商店も多いようだし、この都市の領主はなかなかいい領主のようだな。

しかし、この都市に来て思ったが、やはりこの世界はどうやら古代中国で間違いないようだな。

生活様式や建物などを見る限り、明らかに中国っぽいからな。
まあ、中国の景色などは既におぼろげではあるのだが。

ぐうう……

ふむ、そういえば昼飯がまだだったな。

丁度いい、その店で食べていくか、幸い金に関しては盗賊の財宝から失敬した分があるから問題なからう。

「いらっしやい！」

「店主、すまないが、店主のお勧めを頂けるか」
「へい！」

店主が作り始めたのは……ふむ、麻婆豆腐か。

そういえば、マチルダが結構好きだったな。

ルイズやテファは、辛いから苦手だったようだけどな。

「へい、お待ち！」

では頂くとするか……ふむ、美味しいな。

辛さも丁度いいし、やはり本場の味というのは違うな。

出来ればレシピが欲しいところではあるな。

「きゃあ！」

「お、おい、誰か兵士の人呼んで来い」

む、何か起きたのか？

見に行ってみるか。

「店主、少し様子を見て来るので、このまま置いておいてくれるか」

「へ、へえ……そりゃ構いませんが」

「すまん」

恐らく暴漢でも出たのだろう。

この時代だと、まともな警察組織など無いだろうからな。

そういった輩が入り込んでいても不思議は無い。

まあ、最悪は私が対処すれば問題は無い。

……
……

事件現場

さて、事件現場にやって来たが……どうやら暴漢が子供を人質に取っているようだな。

しかしあの暴漢……恐らくなんらかの薬をやっているな。明らかに正常な目をしていない。

下手に刺激すれば、あの子供の命が危険だな。

「道を空けなさい！」

「そ、曹操様！」

「華琳様、どうやらあの男のようです」

「どうするんだい、華琳」

「決まっているわ、私の領内で不埒な真似は許さないわよ」

ほう、あれが村人から聞いた陳留の領主の曹操か……ふむ、そこそこな覇気だな。

それにお供をしている女もなかなかの剣の腕だな。

しかし、あの少年の服装……あれは明らかに現代社会の制服だな、ちと派手ではあるが。

となると、私以外にも別の世界から来た人間が居るという事か。出来れば彼と少し話してみたいが……

「その子供を放しなさい！」

「へ、へへ、話して欲しけりや、か、金と馬を用意しな！」

「この状態で逃げられるとも思っているのかしら」

「な、なら、このガキも殺すまでよ……へへへ……」

いかんな、既に正常な判断も出来ぬ状態になっているか……このままでは子供の命が危ない。

はあ……子供を救う為だ、でしゃばる事になるが致し方あるまい。

「すまんが手を出させて貰うぞ」

「誰かしら、貴方」

「私が誰かなどどうでもいい、子供が危険なのでな。『加速』」

さてと、相手が気が付かない間に子供を回収つと……それと相手の武器も奪っておいて……よし、これでいい。

さて、そろそろ『加速』の有効時間が切れるな。

「……は、はれ、ガ、ガキがいねえ！」

「探し物はここかね」

「て、てめえ！」

『ストップ』

「こ、今度は体が……な、何しやがった！」

「さあ、その領主一行、相手は動けん、捕らえるなら今だぞ」

「……しゅ、春蘭！」

「は、ははっ！」

ふむ、これで一件落着かね。

余り目立ちたくは無いが、まあ、子供の為だ致し方あるまいな。

「お嬢ちゃん、怪我は無かったか」

「う、うん……」

「お母さんはどこかね？」

「うんとね……あ、お母さん！」

「璃々！」

ほう、あれがこの娘の母親か……ふむ、恐らく弓を使うようだな。それに……なんだか容姿が生前のソフィーネやテファを思い出させるな。

それではお返しするでしょうか。

「ほら、お母さん心配しているぞ、行きなさい」

「うん、ありがとう、お兄ちゃん！」

「ふふ、どういたしまして」

「ああ、よかった、璃々……」

ふふ、やはり親子の抱擁というのは何時見てもいいものだ。
しかし、本当に私もお人好しだな。
この性格だけは、どうにも治らんようだな。

「ありがとうございます、娘を助けていただいて」

「何、構わぬさ、幼子が危険ならば助けるのが人の道というものだ」

「申し遅れました、私、^{わたくし}姓は黄 名は忠 字は漢升と申します」

「私は……藤崎充と申す。あいにくと旅人でな、字というものは無いのだよ。」

「そうでしたか、本当にありがとうございます。何れまたお会い出来ましたら是非御礼を。」

「気にする事は無い、娘さんが無事で何よりだ」

「ありがと、お兄ちゃん……（ちゅ）」

「こ、こら璃々」

「ははは、これは素敵なお褒美だ、お母さんを大事にな、お嬢ちゃん」

「うん」

ふふ、やはり子供の笑顔が一番いいな。

あの娘は、あれだな、テファとの間に出来た娘によく似ているな。
あの娘も元気で明るい娘だったからな……

「そこの貴方」

「ん？ ああ、先ほどの領主一行か、私に何か用かね」

「ちよつと話を聞きたいのだけれど」

「ふむ……」

「貴様、華琳様が来いと言っているのだ、大人しく来い！」

やれやれ、相手の都合も考えぬのかねこの娘は……これは典型的な脳筋タイプだな。

そういえば、新生したアルビオンの將軍にも似たのがいたな。余りにも考えなしなので、ウェールズからの要請で一度徹底的に矯正した事があつたな。

「すまんが食事の最中だったのでな、悪いが遠慮させて頂こう」

と、私が断つたところ、明らかにあの脳筋娘がこちらに殺気を飛ばしてきた。

まあ、別段どうという事は無いのだがね。

義母上の本気の殺気に比べれば、兎戯にも等しい……いかん、思ひ出すとトラウマが。

「あの……すみません」

「……何かね少年」

「貴方のその服……それってスーツですよね？」

「ふむ、そういう君はどうやら学生のようなだね。見たところ高校生かね。」

「やっぱり！ 貴方、日本を知ってるんですか？」

「知ってるも何も、私は元々日本人だ、生粋のな」

「……！ あ、あの、是非話を聞かせて欲しいんです！」

「ふむ……」

この少年の方から話を振ってくるとはな……丁度いいか、彼に聞

いてみたい事もあるしな。

それに、彼の服装からすれば高校生……という事は三国志についても多少なりとも情報を持っている可能性はある。

となれば、今の何もわからない現状を打開する為にも、彼と話をするのは得策だな。

「……わかった、私も君とは話をしてみたい」

「ありがとうございます！」

「と言う訳だ、済まぬが店主に勘定を払ってくるので少々待っていただけるかね」

「ええ、構わないわ」

「では……」

それから程なくして店主に事情を話し勘定を払った。

まあ、出した金が多すぎると店主がびっくりしていたが、私にはあまり意味は無いのでそのまま渡しておいた。

さてこれからあの少年と話をする訳だが……どうにもあの少年、私がハルケギニアに召喚されたときと同じような状況でこの世界に来たのかもしれないな。

私もあの時は着の身着のままだったからなあ……思えばよく生きていたものだ。

あの頃のルイズといったら……今思い出すと面白いな。

和解してからというものの妹としてかなり可愛くなってしまったかなあ。

よくエレンに怒られたものだ、ルイズに甘すぎると。

あれだな、末っ子というのは何時までも甘やかされるものだな。

まあタバサが嫁になってからは、一番下はタバサになったが結局妹として扱われていたのはルイズだったからなあ。

と、昔を懐かしんでいる場合では無いか。

あの少年の話というのは、恐らく私の素性に関する話だろうな。それと、どうやってこの世界に来たか……というところか。

まあ、バカ正直に話す必要は無い。

細かい部分についてはボカしておくべきだろうな。

それとあの曹操という娘……なにやら私を値踏みするような目つきだったな。

恐らく配下に加えようという魂胆なのだろうな。

私は誰に従うつもりもないが……私を従わせられるのは、私自身だけだしな。

まあとりあえずは、あの少年からこの世界の情報を手に入れるとしよう。

それが済み次第、さっさとおさらばさせて頂くとしようかね。

第二幕：陳留の曹操と……（後書き）

今回はちよい役で、紫苑と璃々ちゃんに出ていただきました……
すんません！

紫苑と璃々ちゃん、めっちゃ好きなんです！

描いてる間に、何故かこのような内容になってしまいました……本来はモブキャラにしようかと思ったのですが、どうせだから原作キヤラでと思いまして、子持ちといえば紫苑お姉さん！と言う訳で出しました。

何れまた、紫苑と璃々ちゃんは出す予定です。
ほいでは！

第三幕：一刀との出会い（前書き）

今回で曹操との話し合いは終わりです。

第三幕：一刀との出会い

さて、曹操らに連れられて陳留の領主館に着いた訳だが……無駄にでかいな。

どうやら行政府を兼ねているようだな、先ほどから文官と思しき者が何人か通っている。

やたらと女性が多い気がするが……この世界では女性が優位なのかもしれないな。

まあ、それも悪い事ではない、むしろ女性が強い世界の方が何かと纏まりやすいからな。

しかし、服装が目立つせいなのかわからんがやたらと見られるな。その上、一部はどうも敵対的な眼をしている。

どうやら私はあまり歓迎はされていないようだな。

まあ、どうでもいい事だが。

「ここよ」

「ふむ……」

見た感じ謁見の間といったところか。

にしては、随分とせまい気もするのだがな。

まあ、王宮の謁見の間などに比べてはいかんか。

「話をする前に自己紹介しましょう。私は姓は曹 名は操 字は孟徳よ」

「ご丁寧に痛み入る。私は藤崎充と申す。残念ながらこの国の人間では無いのでな、字というものは無い。」

「やっぱりその名前日本人ですね。あ、俺は北郷一刀って言います。」

「そうか、よろしくな北郷君」

「はい、藤崎さん」

ふむ、なかなか素直そうな少年だな。

それに多少なりとも武術をやっているようだ……恐らく剣術だな。まあ、かじった程度のようにだし、他の者に比べればまだまだだな。

「随分と一刀と親しげね」

「まあ、久しぶりに会う同郷の者だからな、それで曹操、君の話と
いうのは何かね？」

「単刀直入に言っわ、貴方、私の部下にならない？」

やはりそう言う話か、まあ予想通りではあるな。

とはいえ、部下になるつもりは一切無いのだがね。

私は誰にも従うつもりは無いのでな。

まあ、協力ならしてもいいのかもしれないがな。

「ふむ……部下にね」

「どうかしら」

「悪いが断らせていただこう、私は誰に従うつもりも無いのでな」

「貴様！ 華琳様のお言葉を二度も！ 許せん！！」

「しゅ、春蘭！」

脳筋娘が血相変えて斬りかかって来るが、はつきり言って止まっ
て見えるな。

本気を出した義母上や、お互いに加速状態で剣の稽古をしていた
ジョゼフに比べれば……

やれやれ、この程度の事で一々頭に血を昇らせるとは……側近と
して程度が知れるというものだな。

「話の邪魔だ小娘」

「がっ?!」

「春蘭!」

少し覇気を出し、脳筋娘とその主である曹操をけん制しておく。
序に脳筋娘は面倒なので意識を刈り取っておいた。

どうしてこう脳筋気質の奴は……もう少し理性的になる事を覚えて欲しいものだ。

それと、部下の不始末は主の不始末という事をわきまえて貰いたいものだな。

「それと、後ろで弓を構えている者、それを放てば君が死ぬぞ」

「……!」

「……気が付いていたのね」

「当たり前だ、まあ、別にあの程度なら眼を瞑っても避けられるがね」

「……一体何者なのよ、仮にも春蘭は私の軍では最強を誇るのよ、それをああも簡単に」

「ははは、この程度で最強などと言われてはな。私の義母上に比べれば赤子のようなものだ。」

「……一体どんな怪物よ」

「怪物など生易しい、あれは最早存在自体が世界の歪みだ。まあ、普段は非常に優しい方だな。」

うむ、義母上も普段は非常に優しい方だったからな。

ただ、少々戦闘中毒気味というか……暴走癖というか、そういうったものがあるだけだ。

子供達や孫達も非常に懐いていたからなあ……ああ、そういえば、義母上が作ったクックベリーパイは美味かったなあ。

「話が逸れたが、先ほども言った通り君の勧誘は断らせていただく」
「……はあ、何度言っても無駄みたいね」

「ちよつとあんた、華琳様のお誘いを断るなんてどういづつもりよ！」

「止めなさい桂花」

「で、でも、華琳様！」

「彼がその気になれば、恐らく私達全員殺されるわよ」

「ふむ、流石に領主をやるだけはあるな、よくわかつているじゃないか」

「……先ほどの覇気、正直生きた心地がなかったもの」

「まあ、君だけに向けたからな」

「一先ず部下の非礼はお詫びするわ」

「構わぬさ」

判断力はなかなかのものだな、相手が格上であるという事はわかるらしい。

まあ、こういった権力者というのは、得てして相手の実力を認めない者が多い。

相手の実力を判断し認める事が出来る器を持つ者が、権力者として更なる高みへ昇る事が出来る。

彼女はなかなかの器を持っているな。

何れは素晴らしい政治家となれる事だろう。

今はまだ若いからな、経験を積まねばなるまい。

「あの、藤崎さん」

「何かね、北郷君」

「貴方は一体どうやってこの世界に……」

「ふむ……出来ればあまり人には聞かせたく無い話なのだが」

「な、なら、俺と二人だけで話しましょう」

「ちょっと一刀」

「ごめん華琳、どうしても藤崎さんの話を聞きたいんだ」

「……はあ、言っても聞かなそうね」

「ごめん……でも……」

「もう、わかったわよ、後で可能な部分だけは報告なさい」

「ありがとう、華琳。じゃあ藤崎さん、着いて来て下さい。」

「わかった」

そうして、北郷君に連れられ場所を移し、私がこの世界に来た際の出来事を話して聞かせた。

大層驚いていたが、自分自身も妙な体験をしている関係上、疑う事無く話を聞いてくれた。

しかし、魔法の事などについては話していない。

特殊な力があるとわかれば、後ろにいる曹操がまた勧誘して来ないとも限らん。

それに、あまり目立つのは面倒だからな。

「とまあ、私の方はそういう訳でな」

「そ、そんな事が……俺より凄い体験ですね」

「まあ、二度目になるからな、ある意味では慣れたのかもしれん」

「そ、そうですか……」

「それと北郷君、私からも幾つか聞きたいのだがいいかね？」

「あ、はい、俺で答えられる事なら」

変わって今度は私の方から質問し、彼からこの世界について幾つか聞いてみたところやはり三国志の時代で間違いないようだ。

まあ、彼が言うには主だった武将が全て女性らしいのだが……確かに三国志に出て来る武将はほとんどが男だったはずだが……謎だな。

それと、彼に今後起こりうる出来事について詳しく聞いておいた。

黄巾の乱という戦や、霊帝の崩御、反董卓連合などなど戦の目白押しだな。

それらの戦や重要な出来事について、更に詳しく聞き、誰が何をし、どういった事を起こすのかまで彼が知りうる限りを聞いておいた。

最終的にそれらを纏めると、『魏』『呉』『蜀』という三国が覇権を争う事になるようだ。

『魏』といのは、曹操が治める国、『呉』は『孫策』、『蜀』は『劉備』という者がそれぞれ治めるようだ。

大体は飲み込めたが、後で念の為に書に纏めておこう。

しかし、今回も面倒な世界に来てしまったようだな。

やれやれ、どうして私は何時まで経っても厄介事から解放されないのかね。

義母上の呪いだろうか……真剣に悩むな。

「なるほど、酷く面倒な世界に来てしまったな」

「俺もまだ半信半疑なんですけどね……」

「状況的には間違いは無かるう、それに黄巾の乱については既に兆候が出ているようだしな」

「ええ……」

「となると、これから戦か……君も気をつけておくといい、戦の際は後方に居たとしても、状況次第では人を殺さねばならぬかもしれないからな」

「……」

この少年は恐らく人殺しなど出来まいな。

まあ、人を殺す事というのは、なかなか踏ん切りが着くものではないからな。

私が最初に人を殺したのは、アルビオンの内乱の際のあのニューカッスル城での攻防だったが、あれはアレクサンダーの力を使ったので私が直接的に手を下した訳では無いが……まあ、あれも人殺しには変わりはない。

直接手を下さずとも、結局、戦争などで人を殺すのは上に居る者の殺意だからな。

その事を彼も自覚しておかねば……最悪の場合、心が壊れるな。

「いいかね、北郷君、これだけは覚えておきなさい。君が直接手を下さずとも、君が人の上に立つ以上、君の殺意が多くの人間を殺すという事を。人の上に立ち戦争をする以上、全ての命への責任は上に立つ者にある。その事をしっかり肝に銘じておきなさい。でなければ、君は心が壊れてしまうだろうからな。」

「は、はい……」

「君は恐らく人殺しは出来無いだろうからな、心は常に強く持ちなさい」

「……ふ、藤崎さんは、その、人を殺した事が」

「十や二十ではなく、万単位で殺している」

「……！」

中には殺さなくてもよかった人間もいたかもしれない。

とはいえ、それも今となっては結果論に過ぎん。

あの当時は、戦を終結させる事にやっきになっていたからな、どれだけの人間が死ぬかなど考えもつかなかった。

後になって恐ろしくなったものだ。

「まあ、そういう訳だ。日本人だからという理由はこの世界では通

用しないだろう。だから君も、覚悟だけは決めておきなさい。」

「わ、わかりました……」

「さてと、随分と話し込んでしまったな、そろそろ曹操の所へ戻るかね」

「あ、はい、そうですね。あまり待たせると華琳は怒るでしょうか。」

ふむ、そういえば気になったのだが、彼が呼んでいる名前はなんなのだろうか。

愛称などの可能性があるから、勝手に呼ぶのは不味いのだろうか……聞いてみるか。

「北郷君、一つ尋ねたいのだが」

「あ、はい」

「君が曹操を呼ぶ時の呼び方だが、それは愛称かね？」

「あ、いえ、これは……」

北郷君から聞いたところ、彼が曹操や他の者を呼ぶ際に呼んでいる名は『真名』というものらしく、非常に神聖なものであるようだ。本人の許可無く呼べば、首を刎ねられても文句は言えないらしい。なんとという危険な名だ……呼ばなくて正解だったな。

「なるほど、危険極まりないな」

「ええ、藤崎さんも気をつけて下さい」

「そうしよう、助かったよ」

こういうのをあれか、確か初見殺しというのだったな。やれやれ、とんでもない世界だな。

……

……

さてと、曹操の所へ戻って来たが、必要な情報は得られたしお暇するしよう。

あまり長居していても、面倒だからな。

「曹操、悪いが私はそろそろ失敬させて頂くよ」

「何処へ行くのかしら？」

「さあな、特に決めてはいないが」

「そう、でも私は諦めた訳じゃないわ、何時か必ず貴方を私の前に跪かせてみせるわ」

「ははは、私はそう甘くは無いぞ。では北郷君、君も達者でな。」

「は、はい、藤崎さんも」

「ではな」

次は何処へ行くかな、まあ、適当に流していればいいか。
そろそろ黄巾の乱とやらも本格化するようだし、情勢次第といったところかね。

……

……

「一刀、あの男と何を話したのかしら」

「ああ、藤崎さんがどうやってこの世界に来たかなどをね」

「……そつえば、彼も白い衣だったわね」

「うん、彼は俺と同じで別の世界の人間だよ、間違いないわね」

「……確かにあの男、底が見えないわね、恐らく実力で言えば私でも及ばないわ」

「華琳でもかい？」

「ええ、勝てる人間がいるのか怪しいわ」

「そんなに……」

ふふふ、本当に面白いわね。

一刀とは違って、かなりの武と文を併せ持つようだし。

あの男を手中に出来れば……楽しみだわ……ふふふ……

……

……

ふむ、なにやらよからぬ企みをされている気がするが……恐らく

曹操か？

まあ、私を配下に付ける算段でもしているのだろうかね。

そういえば、街の人に聞いたが、ここから西に『洛陽』という都市がありそこが現在の首都にあたるようだ。

情勢を把握する為にも、一度行って見た方がいいかもしれんな。

よし、次の目的地は洛陽だ。

第三幕：一刀との出会い（後書き）

曹操ってより、一刀がメインですわな。まあ、今回は顔合わせ程度ですからね。他の面々に出会うときも、さらっと流す予定です。暫くの間はあまり深くは絡みません。

次回は洛陽なので……あの娘が出ます。

では

第四幕：洛陽に到着：前編（前書き）

今回の話は前後編です。といっても、戦闘あるとかそういうのではなく、単に書いてたら長くなりすぎてしまったので分割しました。では、どうぞ。

第四幕：洛陽に到着：前編

曹操や北郷君との出会いから、既に二日が経過。
現在も洛陽に向け、旅を続けている。

道中、商人の一団らしきものに出会い洛陽までの道を聞いたところ、後一日程度で着く様だ。

まあ、飛行^{フライ}などで行けば恐らくすぐなのだろうが、たまには歩いて旅するのも悪くない。

しかし、北郷君から得た情報からすれば、黄巾の乱が本格化すればこの大陸は相当な規模の動乱になるのだろう。

そうなった場合、あまり悠長に旅をする事も出来ないかもしれん。

とはいえ、私は誰かに仕えるつもりは無い。

正直な話、私が仕えてしまうと、確実にその者の天下となるだろう。

何せ召喚獣を喚び出す^{よびだす}だけでも、相当な戦力だ。

私自身はこの世界では、完全なイレギュラーであるし、争い事には加わるべきでは無いのだろうと思うが……恐らく情勢がそれを許しはしないだろう。

確実に私の元へ厄介事が舞い込んでくるだろう。

本来であれば、能力の使用は注意すべきなのだろうがそれで救える命を失っては意味が無い。

私の能力を知れば、時の権力者などは黙っていない可能性が高いが、救う為なら躊躇する必要はあるまい。

まあ、それで刺客を差し向けられるのであれば、返り討ちにするまでだ。

實際ロマリアからの刺客も何度も返り討ちにしたらなら、ある程度は撃退出来る自信はあるしな。

……

……

あれからは、特に誰とも出会う事も無く順調に旅を続け遂に洛陽に到着した。

陳留でも思ってたが、やはり城壁がでかいな。

これではほとんど監獄では無いか……よくこんな場所で生活出来るものだな。

まあ、今の時代の情勢を考えれば、致し方ないのかもしれないな。さて、考え事をするよりも、さっさと洛陽へ入るとしよう。

「ここが洛陽か……陳留よりも寂れているというか……活気が無いな」

聞いた話では、ここは首都にあたるはずなんだが……酷く活気が無いな。

道行く人も、なんだか疲れた感じだしな。

これはあれか、政治の腐敗が原因なのかもしれないな。

まあ、このような時勢だからそれだけでは無いのだろうかな。

「さてと、先に宿屋を探しておくか」

……

……

程なくして宿屋は見つかり、一部屋借りておいた。とはいっても、私以外に客はいないようだったが。さてと、街の様子を見て回る前に腹ごしらえをしておくか。

「店主、それを一つ貰えるか」
「へい、毎度」

ふむ、これは肉まんかな。
なかなか美味い。

やはり、所変われば品変わるとは言うがハルケギニアとは全く違った食文化だ。

味付けもかなり薄味だからな、少々物足りなくはある。
何れ折を見て、調味料関係を仕入れたいものだ。

「お客さん、困りますよ、そんな所で……」

ん？

なにやら先ほどの店主が揉めているな。
どうしたのだろうか。

「じー……」

……うむ、何やら鬼気迫る感じで肉まんを見つめているな。
あれでは店主も困りものだろうなあ。

しかし、なんとなくではあるが、シャルロットに似ている感じだな。

あれも、私がツマミを作って一人晩酌している時によく現れたものだ。

結果、私の晩酌のあてが無くなってしまっただが……食べ終わっ
た後のあの顔を見ては文句も言えなかったな。
ふふ、懐かしいものだ。

「じー……」

……何時の間にやら私の足元に移動しているなこの娘。
どうやら、私の持つ肉まんが目当てか。
しかし、これは私の昼食だからな、挙げる訳にはいかんのだよ。

「……あゝお嬢さん、腹が減っているのかね？」

「コクコク」

相当腹が減っているのだろっとなあ、眼が不味い状況になっている
ぞこの娘。

はあ、このままでは何時までも付いて来そうだし、仕方ないか、
肉まん一つだけ奢ってやるとしよう。

やれやれ、どうしてこう私は甘いのかね。

「店主、肉まんをもう一つ頂けるか」

「へい」

「……ほら、食べるといい」

「ハムハム！」

「こらこら、そう慌てるな、誰も取りはしないよ」

「……もっと」

いや、ここでおかわりを要求するのか、この娘は……いかん、こ
こで気を許しては際限なく食べられてしまう。

流石にそうなると資金的に問題ありだ。

まあ、金などどうとでもなるのだが、身も知らぬ人間にそこまで

する義理は無いからな。

悪いがこれで打ち止めだ。

「あゝ悪いが私もそう持ち合わせは多くないのでな。残念だがこれで終わりだ。」

「……もつと」

だから、その捨てられた子犬のような目をしながら、袖を掴むでない。

後、泣きそうになるのをやめなさい、非常に困るのだよ。

「いや、だからだな……」

「……もつと」

な、なんなんだ、この形容しがたい感覚は………なんだか非常に悪い事をしているような感じなんだが。

………だあもう、わかったわかった、全部買ってやればいいんだろ
うが！

「店主、すまぬが蒸しあがっている肉まん全て貰えるか」

「へ、へい、でも、よろしいので？」

「……仕方なからう、あれには勝てん」

「わ、わかりやした、お待ち下せえ」

そうして店主から肉まんを受け取った娘は………両頬をリスのようにパンパンに膨らませて肉まんを頬張っていた。

なんとも幸せそうな顔だな………益々シャルロットに似ているな。
しかし、なんだな、名前も知らぬ娘にここまでしてしまうとは……
やはり泣く子には勝てんものだ。

「満足したかね」

「……コク」

「おゝい、れゝん！」

「……霞」

「連れかね？」

「……コク」

「そうか」

向こうから走って来るのは……さらしを巻いた袴姿の少女だな。
というか、ここは中国では無いのか？

何故に袴が存在しているのだ……わからんな。

「何しとんのや、もう会議の時間やで！」

「……ご飯、貰ってた」

「あん？ この兄さんにか？」

「……コク」

「そりやすまんかったなあ、兄さん。どうせこいつ、金無くて集つたんやろ？」

「……まあ、そうとも言えるな」

「あゝ幾らや、うちが払うわ」

「いや、大した金額では無いのでな、構わんよ」

「そかゝ兄さん太っ腹やね。と、こうしちゃおれん、はよいかんと詠の奴に怒られるで！」

会議という……ふむ、格好からして武人なのかもしれんな。
という事は、軍関係者といったところか。

なら、邪魔しては悪いな、私も早々に立ち去るとしよう。

「私も用事があるのでな、これで失礼するよ。縁があればまた会おう、お嬢さん。」

「……待つて。名前、聞いてない。」

「ああ、そうだったな、私は藤崎充、あいにくと字や真名は持ち合わせていないのでな、タカシと名前で呼んでくれ」

「……恋は、呂布奉先……真名は恋」

「出会ったばかりで真名を預けていいのかね？」

「いい、タカシいい人……」

「まあ、君がいいと言うならありがたく受け取るとしよう。ではな恋、縁があればまた会おう。」

「うん」

さてと、暫くはこの街を拠点として情報を集めるとしよう。

幾ら寂れているとはいえ、首都である以上は情報も集まりやすいだろう。

それに、旅に必要な物も色々買い揃えておいた方がいいだろうな。錬金で作るのもいいが、この世界の品物とかけ離れ過ぎていては、色々と面倒な事になりそうだからな。

……

……

「なあ、恋、なんであの兄さんに真名教えたんや？」

「……タカシ、いい人」

「さやか、しつかしの兄さん相当な使い手やな」

「……また会える」

「珍しいな、恋がそこまで言うなんて。なんや、そんなにあの兄さん気に入ったんか？」

「……コク」

「そか」

……
……
しかしあれだな、私が召喚されて暫くの間はハルケギニアも衛生環境はかなり悪かったが……この世界も酷い状況だな。

あれから少し歩いて、貧民街と思しき場所に出たのだが……これは酷い。

死体まで野ざらしの状態だ。

余りにも匂いが酷すぎたので早々に退避したが……あれでは疫病が発生する事になるぞ。

ここの統治者はその辺りを理解しているのだろうかね、全く。

それと、街の方で噂として聞いたのだが、どうやら例の黄巾党に対して大規模な軍事行動が予定されているようだ。

というのも、どうやら皇帝とやらが漸く重い腰を上げたようで、自分の持つ『禁軍』とやらを動かして討伐に乗り出すそうだ。

となれば、恋を呼びに来た少女が言っていた会議とは恐らくその軍の派遣に関するものなのだろう。

まあ、恋もあの少女もなかなかの使い手だ。

恐らくは、軍でもかなりの高位の人間に違いない。

まあ、恋のような子であれば、私の事を言いふらすような真似はしないだろうな。

あの子は十中八九間違いない……純粹だ……天然とも言うが……

と、ともかくだ、近々軍事行動が起きるといっているのであれば巻き込まれない様に、早めに退散しておくのが無難かもしれん。

徴兵などで借り出されるのは御免こうむる。

となれば、あまり悠長にはしてられん、
急ぎ情報を集めて早々に
この街を出るとしよう。
次に向かう街も考えておかねばな。

第四幕：洛陽に到着：前編（後書き）

という訳で恋ちゃんが出ました。流石に経験を積んだタカシでも、あの娘のおなかすいたオーラには勝てないようです。つか、勝てる人間なぞいるのでしょうか？

序に霞姉さんも出ましたね、作者的には珍しく魏陣営でお気に入りキャラです。

今回はボクっ娘とあの娘ともう一人、絵的には確実に10歳前後だろうと突っ込みたくなるあの娘を出します。

本来この時期にはいないはずの娘達ですが、少々時系列を弄って仕事で来ているとしています。

まあ、原作はほぼ無視している作品なので、その辺りはあまり深く気にしないで下さい。

そいでは！

第五幕：洛陽に到着：後編（前書き）

今回は少々短いです。

第五幕：洛陽に到着：後編

恋と出会ったあの日から、三日が経過し、その間も私は街で情報を集めていた。

本来であれば早々にこの街を出るところなのだが、商人達から気になる噂を聞いた為それについてより詳しく調べる為未だ洛陽に滞在している。

その噂というのが……皇帝である『靈帝』の体調悪化に関する噂だ。

噂によると靈帝の容態はかなり深刻な状態であるらしい。

もしそれが本当であれば、この大陸の混乱は更に危険な領域に達する事だろう。

となれば、呑気に旅を続けるのも難しくなるかもしれん。

早めに何処か拠点となるべき場所を確保した方がいいかもしれないな。

「しかし、こつも物資が無いと旅支度を整えるのも面倒なものだな」

「……タカシ」

「ん？」

後ろから声を掛けられ振り返ってみると……誰かと思ったら恋だったか。

というか、この街で私の名前を知っているのは恋ともう一人の袴少女だけだからな。

当然と言えば当然か。

「恋か、三日ぶりだな、どうかしたか」

「……一緒に来て」

「何処にだ？」

「……月のとこ」

「いや、それは真名だろう、真名で言われても誰だかわからんぞ」
「……董卓」

董卓？

誰だそれは……聞かない名だな。

「董卓とは誰だ？」

「……恋の友達、とてもいい子」

「いや、そうではなくてだな……」

「……駄目？」

だから、その捨てられる子犬のような目をやめなさい。

全く、この子自身は意識していないのだろうが、そんな目をされて断れる男はおらんぞ。

ある意味ではこの子はあれだな、男を落す天才なのかもしれん。
いやはや、天然というのは恐ろしいものだ。

「ああ、わかったわかった、わかったからそんな顔をするな」

「……ありがとう」

「やれやれ……で、何処へ行くのだ？」
「こっち」

そうして恋に連れられてやって来たのは……明らかにこの首都の
行政府らしき場所だった。

おいおい、こんな場所に私のような素性の知れない者を入れてい
いのか。

明らかに不味いだろうに。

「恋、私がここに入るのは些か不味いのではないか？」

「……どうして」

「いや、どうしてもと言われてもなあ」

だから、そうやって小首をかしげるのをやめなさい。
はあ、本当にこの子はわかっていないようだな。
益々もってシャルロットに似てきたな。

「およ、何時ぞやの兄さんやないか」

「ん？ ああ、君はあの時の」

「どうしたんや、こんなところに」

「いや、恋に連れられてな……董卓という人物に会わせるそうなんだが」

「月っちに？ 恋、どういう事や？」

「……お礼、それにタカシいい人」

「お礼って……ああ、この間の肉まんか、別に構わんのだが」

「あゝあかて兄さん、恋は一度言い出したら聞かんからなあ」

「……そのようだな」

「そういや、兄さんとは正式に自己紹介してへんかったな。うちは
姓は張 名は遼 字は文遠や、よろしゅうな」

「ああ、そうだったな。私は藤崎充、字や真名は無いのでな、タカ
シと名で呼んでくれて構わんよ。」

「さよか、そうさして貰うわ」

なんというか、随分と気さくな人物のようだな。

しかし……何故関西弁なのだ？

ここは日本ではないんだぞ、明らかにおかしいだろうに。

まあ、それも今更かもしれんが……

「んで、月っちのところに行くんやろ、ならうちも一緒に行くわ。丁
度用事もあるよってな。」

「……霞も一緒」
「わかった」

ふう、なんと言つか恋には勝てん、というか、勝てる気がしない。物理的には勝てるのだろうが、正直な話、気持ち的というかなんとというか人情としてこの子に刃を向ける事はどうしても出来んなような気がする。

それもこの子の放つ、なんというのか、小動物的なオーラのせいかもしれない。

とはいえ、恋もかなりの使い手なのは間違いない。
恐らく戦場に出れば雰囲気も変わるのだろうな。

……

……

連れて来られた場所には、三人の少女と一人の女性がいた。

一人は眼鏡を掛け随分と気の強そうな印象だ……なんだかエレンに似ている。

二人目は……どう考えても子供だろうと思われる風体だな。

三人目は……ふむ、随分と儚い感じだな、正に美少女と呼ぶに相応しい感じだな。

最後の女性だが……武人か、それもなかなかの腕のようだな。

「あら恋に霞、どうしたの？」

「恋殿、おかえりなさいなのです！」

「恋さん、霞さん、おかえりなさい」

「ただいま」

「おう、帰ったで。それと恋が連れて来た客人や」

そうして四人に紹介された私だが……私と恋の経緯を聞かせたところ随分と謝られてしまった。

まあ、恋のあれは一種の集りとも言えるから、致し方ないのかもしれないが……私としてはそこまで気にしていないので、構わないと言ったのだが眼鏡を掛けた子が金を払うと引かないので致し方なく受け取る事にした。

随分と律儀な子だ。

「にしても恋がそこまで懐くなんて珍しいわね」

「そうなのかね？」

「ええ、恋は滅多に私達以外には懐かないわ」

「ふむ」

「恋さんも、随分嬉しそうですね」

「……タカシ、いい人」

随分と懐かれてしまったな……これはあれか、餌付けしてしまったのだろうか。

恋ならばあり得るなあ……この子だと、食べ物で釣ればすぐさま付いて来るだろう。

なんだか非常に心配になって来るぞ。

……

……

「そう言えば張遼、少々尋ねたい事があるのだがいいかね？」

「何や？」

「近々軍事行動が起きると聞いたが」

「ああ、最近黄色い布を付けた賊の数が半端やのうてな、それを退治する為や」

「なるほど、黄巾賊の連中の討伐か」

「そうや、にしても黄巾賊か、わかり易いしうちらもそう呼ぶか」

「……コク」

「そうだな、その方がよからう」

「正直なところ、張遼達なら問題は無いと思うが、数が数だからな」

「そうなんよ、えらいごつつい数がおんねんな。正直面倒やわ。」

「確かにな」

恋と張遼、そして華雄の三人がいれば問題無く討伐する事は可能だとは思うが、何せ相手は既にどれだけの数に膨れ上がっているか検討が付かない。

北郷君の話では、最終的には二十万規模にまで達するようだし、恐らく今の段階でも数万規模になるだろう。

となると、流石にこの三人がいても少々厳しいかもしれんな。

………

その後は各人と幾つか話しをし解散となった。

話の中で董卓達が洛陽にいる理由が出たが、元々董卓は別の都市の県令を務めているらしく税を納める為に、態々洛陽まで来たらしい。

その際、元々親交のあった將軍である張遼に紹介され恋とも知り合ったそうだ。

董卓自身は非常に穏やかな娘のようだから、恋も懐いたのだろう。

なお、話の途中、張遼と華雄からは非にと模擬戦を挑まれたので相手をしたのだが……やはり予想通りかなりの使い手だった。

張遼は速さを生かした変幻自在の攻撃、華雄は力と武器の重さを利用した強烈な一撃を放って来た。

あれだけの力量ともなると、早々勝てる相手はいないと見える。

そのせいか私も久々に気合が入ってしまい、両名とも最後には気絶させてしまった。

……少し大人気なかったかもしれない。

目が覚めた後、何れまた模擬戦をやるうという事になってしまった。

まあ、あの二人は相当な武人である以上、私としてもいい刺激になるので構わんが。

序に模擬戦の後、賈馱から仕官しないかと誘われたが丁重に断った。

案の定というべきかなんというべきか、恋が泣き付いて来たのがこればかりは承諾する訳にはいかない。

恋には悪いが、心を鬼にして断った。

……物凄く罪悪感を感じるのは何故なんだろうか。

それと、最後に陳宮という娘とも話をしてみた。

彼女はどうかやら恋に憧れ、恋に付いている軍師らしい。

まあ、私に対してもあまり悪い感情は無いようで素直に話してくれていたが……正直まだ精神的に幼すぎる。

あれでは軍師としてはまだ二流止まりになってしまう。

そう思い、彼女にもう少し理性的かつ冷静に物事を見極めるようにいい含めておいた。

彼女自身、自分が熱くなり易い傾向にあるのは気が付いているようで、治そうとは努力しているらしいが上手くいかないようだ。

生まれ持った性格を治すのは容易では無い以上致し方あるまい。

とはいえ、自分の欠点に気づきそれを治そうと努力しているのは素直に尊敬出来る。

何れは彼女もいい軍師になる事だろう。
成長が楽しみだ。

ではそろそろ軍事行動も本格化するようだし洛陽から出るとう。

以前に北郷君から聞いたが、なんでも南東にいる孫策という人物はなかなかの人物らしい。

まあ、今は色々と問題を抱えているという噂を旅の商人から聞いているが……一度行ってみるのもいいかもしれん。

恐らくだが、私の予想として以前に出会った曹操、それと董卓と孫策、この辺りはこの乱世の中心的存在となってくるだろう。

曹操は野心を抱いているようであつたからな、確実に名乗りを上げるはずだ。

董卓は……さほどそういった面に興味があるとは思えんが、北郷君から聞いた反董卓連合という戦いにおいてはある種、敵側の主役のようなものだからな。

確実に乱世に食い込んでくるだろう。

最後の孫策は、北郷君からの話と噂程度ではあるが、恐らくは間違い無いだろう。

乱世の時代というのは得てして英雄と呼ばれる人間が多数現れるものだ。

ならばこそ、その英雄となりうる人物はこの眼で見ておくべきだろう。

私自身がこの乱世に関わる関わらないは別にして、時代の中心的人物の情報は集めておくに越した事は無い。

そうと決まれば、早速出発するでしょう。

……

……

宿屋に料金を支払い、街で旅に必要な物資を買い集め出発したが、南東の呉に行くとなると歩きではかなり時間が掛かるな。

ここはあれだな、イクシオンでも喚び出すよびだすか。

まあ、イクシオンなら見た目は馬だからな、あまり違和感はあるまい。

では早速……

「来い！ イクシオン！！」

『ヒイイイイン！！』

「久しいな、イクシオン」

『……（そうだな、境界を越える者よ）』

「どうやらまた私は別の世界に来たようだな、悪いが力を貸してくれるか」

『……（我は境界を越える者に従うと決めている）』

「助かる」

『……（何処へ向かうのだ）』

「南東だ、そこにこの時代の中心に成り得る人物がいる」

『……（わかった）』

久しぶりにイクシオンに騎乗したが、やはりイクシオンは速いな。流星は雷の神獣なだけはある、地上を走る速度はかなりのものだな。

その上揺れもほとんど無いからな、頗る快適だ。

のんびり歩くのもいいが、やはりこうして友と共に旅をするのはまたいいものだ。

それにしても、やはり古代中国という事もあつてか、街道の整備などはあまり行き届いている感じではないな。

この世界には魔法という便利な力は存在しないから無理も無いのだろうが。

にしてもだ、もう少しマシな道に整備した方がいいとは思うのがな。

これでは旅の商人とかも辛いだろうに……物資が円滑に動かなければ、それだけで経済が衰退してしまうのにな。

まあ、どの道、今の皇帝やその側近連中は自分の腹を肥やすしか考えていない下種の集まりのようだから期待するだけ無駄だろう。

「しかし、この世界はどうも違和感があるな」

「……（確かに）」

「なんとなくか、誰かに常に見られている感じだな……」

「……（ああ）」

「何れその辺りも調べるべきだな……面倒な事に成らなければいいのだが」

ハルケギニアにいたときも視線は感じてはいたが、この世界で感じる視線はどうもそれとは違う。

なんと言えはいいのか……生ぬるいというか、おぞましい視線を感じる。

これは注意しておいた方がいいかもしれん。

……

……

イクシオンに跨り進む事はや二日、未だ呉という都市は見えて来

ない。

しかし、昨日黄色い布を付けた一団を目にしたがあれが黄巾党で間違いないのだろう。

となれば黄巾の乱は始まったと見て間違いは無いか。

ついにこの世界でも動乱が始まるという訳か。

「ついに動乱の幕開けか」

『……（何処の世界でも人間は変わらぬ）』

「耳の痛い話だ、だがまあ人間から争いを拭い去る事は出来んだろ
うな」

『……（かもしれぬ）』

「しかし、私はこの世界の動乱には余り関わりたくは無いが……そ
うもいかんようだな」

『……（境界を越える者がこの世界に来た以上、何かしらの意味が
あるのだろう）』

「そうかもしれない」

確かに一度死を迎えた私がこうして若返りこの世界に来た事には
何らかの意味があるのだろう。

だが、正直なところ、この世界の動乱はこの世界の者達で解決す
べきだろう。

でなくては意味が無いのではなからうか。

まあ、それを言ってしまうと私がハルケギニアでしかした事は
何なのかという事になってしまうのだが。

難しいものだ。

……

……

それから、イクシオンの最大速度で飛ばし漸く呉という都市が見えて来た。

やはり海に面しているのか懐かしい潮の香りがする。
久しぶりに海鮮料理でも食べたいものだ。

「さて、この都市では何が起きるのかな」

不安と少しばかりの期待を胸に私は呉の都市へと到着した。

第五幕：洛陽に到着：後編（後書き）

月たちとの話し合いの部分はかなり簡略化していますが、本格的に黄巾の乱が始まるまでは大体こんな感じで進みます。

次回はいよいよ呉です。

とはいっても、まだ居つく事にはなりませんけどね。

当分の間は各地を転々とします。

んでは！

第六幕：江東の小霸王

呉に到着し、二日が経過した。

ああ、ちなみに、ここは呉の国内の『江都』という都市らしい。てつきり呉という都市があるものと勘違いしていたが、呉というのは国名らしいのだな。

いかんいかん、国名や地名はしっかりと覚えなければ。

江都に到着後、街中で現在の情勢等について色々と聞いて回った。その際都から遠く離れたこの地でも霊帝の体長悪化に関する噂は流れてきているという事を知った。

これはいよいよもって危険な時代に入るという事か。

それに加えて、各地の黄巾党も活発化していて既に手が付けられない状態らしい。

なんでも先日行われた大規模な軍事行動もさしたる効果はなかったそうだ。

恋達は無事だといったのだが……。

しかし、正規の軍隊でも止められないとなると、黄巾の乱が始まったという事で間違いは無いか。

となれば、何れは各地の豪族や県令が集まり掃討作戦が開始されるだろう。

その時は一応様子を見に行くべきか……時代の節目になるであろうから。

それと、この都市に來た目的である孫策という人物だが、話を聞く限りでは頗る評判がいい。

民とも直接触れあい、気さくに話しが出来る人物のようだ。

ふむ……それならば民から人気が出るのも頷ける。

ただ、どうやら現在の孫策は袁術という人物の客将となっているらしい。

その理由としては、孫策の母親が死亡した際、領地を袁術に奪われたようだ。

跡継ぎがまだ未熟なのに当主が死亡した場合、領地を掠め取られるなんて事はよくある話だ。

孫策の場合もそうだった事情なのだろう。

とはいえ恐らく孫策も黙ってはいまい。

何れはその牙をむき出しにする事だろう。

「世の中ままならんものだ」

さて、今日も情報集めにいそしむとするか。

出来れば黄巾の乱に関するもっと詳細な情報が欲しいのだが……。

……
……

商店街

しかし、この都市の商店街は陳留の商店街とはまた違った……下町的な感じの賑やかさだ。

私は何処までいっても日本人という事なんだろう、こういった賑やかさの方が好ましい。

まあ、王宮の華やかさも悪くは無いのだが。

「店主、その肉まんを一つ貰えるか」

「へい、毎度！」

ふむ、魚介類入りか……なかなか美味い。

やはり海が近いからなのか、商店にも魚介類をよく見かける。

刺身でもあれば、王の財宝に入れてある日本酒で一杯やりたいところだが。

流石にこの時代の中国では刺身は無いか。

「ん、あれは……」

ふむ、秋刀魚の塩焼きか……なかなか美味そうだな。
一つ買っておくか。

「店主、悪いがそちらの秋刀魚の塩焼きも貰えるか」
「へい、どうも！」

ふむ、これなら日本酒に合いそうだな。
よし、せっかくだし一杯やるとするか。

……

……

先ほど購入した秋刀魚の塩焼きを肴に一杯やっていると、前方から歩いて来る人物に目が止まった。

ふむ、曹操程では無いがかなりの覇氣の持ち主だな。
恐らくあれが孫策だろう。

しかし……徳利のような物をぶら下げているが、いいのだろうか、

あれは。

まあ、昼間から酒を飲んでいる私も人の事は言えないが。

「あら、私に何か用かしら」

おつといかん、つい見つめ過ぎたようだ。

女性を許可無く見つめるのは、紳士としていけない事だ。

義母上にも散々指導されたのに、どうやらまだ癖が抜けていないのかもしれない。

気をつけねば。

「いや失敬、貴女の美しさについて見とれてしまつてね」

「あら、嬉しい事言ってくれるわね」

しかし、先ほどから彼女の視線が私の持つ日本酒に注がれているのは気のせいだろうか。

やはり飲みたいのだろうか……少し聞いてみるか。

「……よければ飲むかね？」

「いいの？」

「それだけ熱い視線を送られてはな」

「あらやだ、ごめんなさい、つい」

「構わんさ、さ、どうぞ」

「それじゃ頂くわ……『ゴクツ』……美味しい、ちょっとこれ何処で手に入れたの?!」

「ああ、これは私の国で作られた酒だ、生憎とこの国では材料が手に入らないので作れんのだよ」

「そうなの、残念だわ」

本当は材料その他も錬金で作れるのだが。

何せ、エレンとコルベールさんが色々と解析した結果、ハルケギニアの食文化は変わったからなあ。

日本酒が当たり前に売られていたし、最終的にはジャンクフードらしき物もあったからなあ。

全く、今思い出してもあの二人は天才だ。

「それはそうと、貴方、この国の人間じゃないのね」

「まあな、東の方から来た」

「へーそうなの」

「そういう貴女は、この都市の代表者である孫策殿だろう？」

「あら、私の事知ってるの？」

「江都にいい県令がいるとね、洛陽で聞いたよ」

「そうなの、私ってそんなに有名なのかしら」

「まあ、見目麗しい女性が県令なら噂にもなるう。それにだ、どうやらかなりの武をお持ちのようだしな。」

「あら、わかるのね」

「まあな、私も多少は武の心得があるのでね……しかし、貴女は身の中に修羅を秘めているな、飼いならせてはいないようだが」

「……」

「それを飼いならす事が出来れば、武人としては更なる高みに上り詰める事だろう」

「……凄いわね、そこまで分かるなんて」

間違いなく義母上の教育の賜物だろう。

何せ義母上の特訓という名の拷問は、熾烈を極めるなんて言葉では言い表せない位に凄かったからなあ。

何度死んだ方がマシと考えた事か。

今思い出しても震えが来てしまう。

……
……

それにしてもこの男……多少武をかじってると言っていたけど、そんなものじゃないわね。

恐らくは私や祭でも勝てない。

それだけの武を秘めているわ。

それにこの男の見た目……あの噂に合致するのよね。

別の国から来たというのもそうだし、もしかしたら役に立つかもそれに……私の勘が囁くのよね、この男を確実に物にしろって。なんとか物にする為にも、城に連れて帰ろうかしら。

「どうしたね孫策殿、私の顔なぞじっと見つめて」

「あらやだ、ごめんなさい」

何か考え事をしている目だな。

まあ、恐らくはさっきの話の事だろう。

彼女自身も自分の身の内に潜む修羅には気が付いているはず。

ああいったものは得てして何かのきっかけが無いと御する事は難しいものだ。

「さて、では私はこの辺でお暇しよう」

「ちょっと待って」

「……何かね？」

「せっかくご馳走してくれたんだもの、お礼しないと気がすまないわ」

「いや、酒の一杯位構わんのだが」

「いいから、一緒に来て」

そう言つて有無を言わせず私を引つ張つて行く孫策。
なんというか、この強引さはキウルケに似ている感じだな。
あれもよく私達を引つ張り回したものだからなあ。
何時まで経つても私は女性には勝てないようだ。

……

……

居城

孫策に引きずられ連れて来られたのは案の定、この都市の城。
この流れからすれば十中八九、勧誘される事は間違い無い。
私の勘がそう告げている。
曹操の時と同じような事にならなければいいんだが。

「雪蓮……今まで何処をほつつき歩いていた」

「げっ……冥琳……あはは」

「全く……ん、その男は？」

「ああ、お酒ご馳走になつたからお礼しに連れて来たのよ」

「……問答無用だつたがね」

「男が細かい事気にしちゃ駄目よ」

本当にキウルケに似ている。

しかし、何処こつも色々と共通点があるのか。

謎だ……。

「そうか、家の雪蓮が迷惑を掛けたようですまない」

「いや、構わんよ。酒を一杯奢っただけなのでね。」

「そうか……それよりも雪蓮、仕事が溜まっているとあれほど言っただろうが！」

「だって〴〵お酒飲みたかったんだもん」

「だもんじゃない！」

この様子では随分と苦勞しているようだな。

まあ、仲は非常に良いのだろう。

主従関係でこのように言い合えるのはそうは無い。

「……と、すまん、客人に恥ずかしい所を見せてしまった」

「いや、構わんさ。ああ、そうだ自己紹介がまだだったな私は藤崎充と申す。姓である藤崎か名である充で呼んでくれ。」

「そうか、私は姓は周 名は瑜 字は公瑾だ」

「私はもう知ってるみたいだけど一応ね、姓は孫 名は策 字は伯符よ」

周瑜か、確か北郷君の話でも名前が拳がっていた。

呉の重鎮にして、かなりの軍師と聞く。

確かにこの女性は知性に溢れている感じではある。

どこことなくだが研究者としてのエレンに似ている……体系は真逆だが。

「それで孫策、この後はどうするのだ？」

「ん〴〵そうね、お酒でも飲もつか？」

「……雪蓮……お前という奴は……」

「おいおい、県令が昼間から酒を飲んでいては不味いだろう」

「いいのよ、冥琳がいるから」

信頼しているのか押し付けているのか……まあ前者なのだろうが。

にしても、周瑜の方は青筋立てているが……。
本当に苦労しているようだ。

「それじゃ行きましょ、冥琳も付き合いなさい」

「おい！」

「いいからいいから」

……

……

中庭

庭のような場所に連れて来られたが、さてどうなるのやら。

「さ、座って」

「ああ」

「はあ……仕方ない、少しだけだぞ雪蓮……」

「わかってるわ」

向こうから切り出される前にこちらから先手を打つとするか。
先行されてばかりでは交渉には勝てんからな。

「それで孫策、私に話があるのだろうか？」

「あら、わかった？」

「わからんはずは無いだろう、それだけ熱い視線を送られてはな」

「ふふ、そう、なら話しましょうか」

孫策からの話は予想通り仕官の話だった。

何故こうまで私を仕官させたがるのか甚だ疑問だ。

まあ、勿論受けるつもりは無い。

彼女も恐らく曹操と同じで、大陸の覇権を狙うのだろう。

なればこそ、やはりこの大陸の事はこの大陸の者が決めるべき。

私のようなイレギュラーな存在が横槍を入れるべきでは無い。

このような思いから、孫策の話は断りを入れた。

まあ、かなり粘られてしまったが、私自身今のところは心を変え
るつもりは無い。

旅を続け、この世界の事をもっと知ってからならまた別かもしれ
んが。

「もう、貴方、かなり強情ね」

「悪いな、私は今のところ誰に仕えるつもりも無いのでね」

「でも、私は諦めないわよ」

「……やれやれ、曹操にも同じ事を言われたよ」

「曹操に？」

「ああ、陳留で会った時にな。君と同じように私を仕官させるつも
りだったようだ。」

「そつなの……でも、負けないわよ」

「そつか、まあ、私はそう甘くは無いからな」

それからは、ほとんど酒盛りになってしまった。

途中、周瑜と政治学について話したが、そのせいか周瑜からも勧
誘を受けてしまった。

それもかなり切実な感じで……。

どうやら、孫策の部下には武将が多いらしく軍師となる者が若干
不足しているらしい。

故に周瑜の後継者となるべき者も、未だ育っていないようだ。

まあ、話を聞く限りでは、どうもこの地に住まう者の気質的な事

も関わっているようだが。

……

……

「さて、それでは私はこれで失礼するよ」

「あら、もう行っちゃうのかしら」

「うむ、まあ、まだこの街にはいると思うが……そういえば孫策、この地では最近黄巾賊なる賊は出没していないのかね？」

「散発的には発生しているけど、他に比べればまだ少ない方よ」

「ふむ……」

「でも、何れは各諸侯に対して討伐命令が出るでしょうから、私も出ないといけないわね」

「そうか、数だけは多いから十分に注意する事だ」

「ありがと」

「では、縁があればまた会おう」

……

……

ふむ、しかしまだ諸侯に対して討伐命令が出るほどでは無いのか
とはいえ、近い内に討伐命令が下るだろう。

そうなってしまうば、なかなか悠長に旅を続けるのも難しいかも
しれん。

今の内に出来る限り黄巾賊についても情報を集めよう。

確か、北郷君の話ではく張角く張宝く張梁くというのが黄巾

賊の首領らしい。

ならばその三人についても、可能な限り情報を集めよう。

「さてと、情報を集め終わり次第この街を出るとして、何処へ行くべきかな」

何れ黄巾賊が終結する地点の近くに向かうとするか。

恐らくはそう遠くない未来、黄巾賊に対する諸侯の一斉反撃が始まるはず。

そうなった場合、かなり大規模な戦となるだろう。

この世界の情勢を把握する為にも、戦場に出来る限り近い場所に居たほうがいい。

まあ、あまり関わりたくは無いが、間違いなく私は動乱の渦中に飛び込む事になる。

なればこそ、自らその渦中に飛び込む事で真実を知るべきか。

やれやれ、本当に私の周りでは厄介事が尽きぬものだ。

はやく、のんびりしたいのだがね……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5880q/>

オタリーマンの外史生活

2011年7月25日00時40分発行